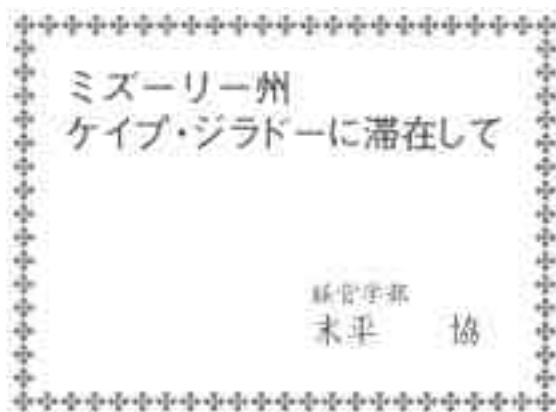


日本ではいいもの悪いものの差が少ない代わりに選択の幅が狭い。(最近は「差別化」のあおりでこの傾向は薄れ始めていますが。)しかし...こんなことを考え出すときりがありません。もうやめます。皆さんもアメリカに行く機会があったら、なかなか見えない面をあえて見るように心がけてください。何についてもいえることですが、既に出来上がったイメージが真実とは限りません。唐突ですがこれにて。



SEMO 大学にはもうこれまでに3度行ったことになる。初めは94年であり、その後99年、2000年である。これらの滞在のうち今年夏の間は3週間ほど学生たちと滞在することができたので、これまで訪れることのなかったミズーリー州とその近辺の幾つかの町や村を見ることができた。やはり、夏のあいだは良い天気が続くので私たちの行動半径が広がり、名古屋市におけるよりも高い気温にもかかわらず、あちこちを当地にいるあいだに見ておいてやろうとする意欲がかき立てられた。

ケイブ・ジラドーは、人口6、7万人の小さな市で、学生数が一万人ほどの大学が市の中心部分を作っている学園都市であるといつてよい。ただ、日本の同じ程度の人口の都市に比べれば、やはり市域は広くてずっとゆったりした町並である。町の中心部から車で5分も外に出れば、森や林が道路の両側に広がり、目にはいる建物の間隔はまるで北海道の田舎のようである。しかし、このように広大な空き地がふんだんにあることと、自動車

の普及が、町の中心部の過疎化と、郊外での大きな商業地区の誕生をどんどん押し進めていく。ケイブ・ジラドーのかつてのダウントウンは平日には買い物客の姿はまばらで、19世紀に建てられた風格のあるロイヤルニューオルリンズや、南北戦争中に一時北軍のグラント將軍の司令部として使用されたポート・ケイブ・ジラドーの煉瓦作りの建物なども、今ではケイブの「歴史的な下町」と名づけられて、その他の多くのしゃれた造りの建物と一緒に半ば観光客にながしかの郷愁を感じさせる場所として存在しているに過ぎないようにみえる。人々は、何処の国でも今ではそうであるように、より便利なところに住み、効率よく毎日を送ることを望んでいるかのようにみえる。19世紀まではミシシッピー川が北部と南部を繋ぎ、産業や観光業でも中心的な役割をになっていたけれども、今世紀の半ば以後は、数隻の観光船がオハイオ州のシンシナティーからニューオルリンズまで、19世紀をなつかしむ観光客を乗せて回遊しているにすぎない。かつて、河川が商品輸送の役割を担っていた時代は今では遠い過去のものとなり、河川は鉄道にとって変わられ、更に車と飛行機がこの広大なアメリカ合衆国の陸地をめぐっている。

しかしながら、こうして、ケイブの町が過去の面影を失い、次第に近代的な町へと衣替えをしていく反面、現代の喧噪と能率化から逃れ、かつての静かで手作りの、より人間の匂いのする過去の遺産を愛し、大事に後世に残しておきたいと考えている人々が沢山いるのも事実だ。その一つが、セントルイスとケイブのほぼ中間に位置するセント・ジェネビーブの町であり、そこに今も多数残っている18世紀のフレンチ・コロニアル造りの家々は、現在も個人が使用したり、既に記念的な建物として大切に保存されたりしている。多くの建物が18世紀、あるいは、19世紀初頭の建物であり、Sさんは1795年の家を手に入れて少しずつ補修工事をしながら住んでいる。このような古い建造物を21世紀に残していくことにはお金もかかり大変なことと思われるけれども、州と町が古い家々保存のために積極的な姿勢をとり、基金を

募ったり、保存協会を組織したりして家主に建物保存のための金銭的援助を与えたりしている。2000年の8月現在で30軒が‘歴史的遺産’として指定され、今後さらに古い建築物が遺産として保存されていくようである。Sさんもまた、自分の家屋が早く歴史的家屋に指定されるのを心待ちにしている。

これらの家屋が今も当地に多数存在しているのは、アメリカ政府による1803年のルイジアナ購入以前には、フランスがルイジアナ地方（現在のルイジアナ州よりもはるかに広大な地域）を所有していたからである。それ故、今もミズーリー州付近から南にかけてはフランスの影響が城塞やフレンチ・コロニアルスタイルとして残り、セント・ジェネビーブとミシシッピー川の対岸のランドルフ郡には、フレンチ・コロニアルスタイルの家屋としてはそのあたりで一番瀟洒なピエール・メナード・ホームがイリノイ州の歴史協会によって大切に保存されている。また、シャルトル城塞は18世紀当時のフランス軍の要塞としてアメリカ合衆国内で唯一完全な形で残っているもので、場内の博物館の資料により19世紀当時のルイジアナ地方でのフランスの影響力を推し量ることができる。このように、ケイブ・ジラドーから少し北に足をのばせば、18、19世紀の外国の歴史的遺産をあちこちに垣間見ることができるし、また、ケイブのすぐ郊外には、1838年から39年の冬にかけてオクラホマの居留地へと強制移動させられて、多くの命を落としたチェロキー・インディアンたちがたどらねばならなかったTrail of Tears（涙の道）がオクラホマ州に向かって通じている。

このような過去の歴史的遺産にたいして、あるものは‘負の遺産’として現在の良心的なアメリカ人たち心の痛みとして残り、彼らが私たち日本人が知る以上にこれらの問題に対してデリケートな反応をせざるをえないのが現状である。アメリカ合州国という、20世紀において様々な分野で世界の最先端を走っているかにみえる国が、こうして、中央政府から遠い小さな町を中心にし、その周辺で生起してきた歴史・物事を考えてみれば、

より新たに21世紀に向かう力と、過去の歴史を見つめて、アメリカをこれまで作りあげてきたものを大切にしなければという謙虚な意識の、二種類のものぐつかりあっていることが分かる。

より大きな資本を持つ企業による大規模なショッピング・センターの開発、また、自動車、電話、テレビ、コンピューターなどによる、より便利で快適な生活の追求、このような生活を多くの人々はこれからもケイブ・ジラドーの町で追い求めるのかもしれない。しかし、そのような将来に小さな異議を唱えるかのように、人の誇りや独自性こそが大切だと考え、人間としての生き甲斐とは何なのかを、草の根を根気よく捜す人のように、個人のレベルで手探りしながら地道に生きている人々をこの地に見いだしうるのは素晴らしいことだと言わねばならない。



2000年ハリウッド映画『U-571』（原題U-571）、『グラディエーター』（GLADIATOR）、『ダイナソー』（DINOSAUR）の3作を8月の炎天下の上海で観ることになった。アメリカにおいては、メモリアル・デー（Memorial Day）を挟んだ5月～6月における映画収益ランキングがそのまま年間の映画興行成績となる傾向が続いているといわれ、上記の3作は、いずれもアメリカの2000年度映画ランキングのベスト5に名を連ねる話題作である。

## 東アジアにおけるハリウッド映画公開

中国、韓国などの国々における映画上映は、わが国同様にアメリカ映画がマーケットを席卷して